

2022 年 7 月の総評に代えて

○ 林 桂 ○

● 郡 司 和 斗 ● （ 茨 城 県 24 歳 ）

電話がまだ
うつくしかった季節に
よく靴を磨いた

【評】携帯電話が普及する前の固定式電話の時代。革靴もまた同じようにうつくしい特別な存在だったのである。

● 大 橋 弘 典 ● （ 群 馬 県 20 歳 ）

信頼の代わりに居座ってる金魚

【評】時に金魚は心の拠り所のようになって、水槽を泳いでいる。本当に「信頼」するべきものに遭遇する前のしばしの時間。

● 春 町 美 月 ● （ 大 阪 府 45 歳 ）

声の小さい私の側に
そない言わんといたって
って言ってくれる

祖母がいたこと

【評】内気でうまく人の中に溶け込めな
いでいる幼い私の絶対的な庇護者とし
て、祖母はいつも現れてくれたのであ
る。

● 浅葱 ● （愛知県 22 歳）

線路から陽炎のにおい

【評】陽炎の立ち上る鉄路。ほとんど列
車のくる気配もないローカル線だろう。
どこか懐かしく心に仕舞われていた風
景。ひとりぼっちの夏休みか。

● 風船 ● （東京都 31 歳）

人生で一番髪の毛の長い今夜は
月明かりの下で
編みものをすると 決めた

【評】今夜の私は、人生で一番長生きし
た私。常に現在は、自分史上何かの一
番を生きている。一番長い髪の毛の夜にす
る編み物は、何か儀式めいてみえる。

● 立花 ばとん ● （東京都 21 歳）

毛細血管を巡るように
慎重に眠りながら
大学に行き、
帰る

【評】大学への毎日、広いキャンパスも決められた細道を歩くように、正確に巡って生活している。しかし、この文脈に埋め込まれた「眠りながら」が持つ違和感は、単に眠いということではないからだろう。

● 源 楓 香 ● （北海道 21 歳）

明日から涙に税を課すけれど
誰も泣き止まないような国

【評】究極の感情表現のひとつである涙（泣く）に、税を課するような国家は既に終わっている。それゆえに誰も泣くことをやめない。既に私たちの「涙」に当たるものにも課税されているのかもしれない、と思う。

● 猫谷 圭希 ● （広島県 22 歳）

僕がまだ言えないでいる事を
右手の水風船が
ぽちゃぽちゃ告げる

【評】最終行が愉快。「〇〇は口ほどに
ものを言い」の、〇〇が「水風船」で
ある面白さ。

● 青野陽 ● （熊本県 19 歳）

何もかも教室に捨て置いた
窓の向こうで雲が弾けてたから

【評】「窓の向こうで雲が弾けてたから」
をどう読むかで、一行目も違ってくる。
原爆雲のようにも思えるし、単なる入
道雲のようにも見える。教室の日常に
急に割り込んできた非日常であるには
違いない。

● 氷丸 ● （茨城県 19 歳）

電車去って

日曜が戻る
線路沿いの風を重たくする
ナガミヒナゲシの静かな性欲

【評】最終行が印象的。それまでの3行を回収するのではなく、さらに謎を深める。「ナガミヒナゲシ」が効いている。油断すると一面に広がる毒性のオレンジ色の雑草だ。

● 高々 ● （愛知県 46 歳）

白線を選んで歩く
夏至の少年

【評】路肩の白線。少年は単に歩くのではなく、歩くことに目的を入れる。時に石を蹴ったり、缶を蹴ったりもする。

● 奎いう子 ● （佐賀県 38 歳）

裏路地に撒く撒菱と天の川

【評】撒菱を撒くのは忍者である。どんな少年忍者の想像が、路地裏に撒菱と天の川を撒いたのであろうか。

● 田崎森太 ● （東京都 71 歳）

七夕の牛轡してる老ピノキオ

【評】人間の子になったゆえに、ピノキオは老いるはずである。老いたピノキオは、革職人となって、余生を送っているのだろうか。

● 吉沢美香 ● （宮城県 22 歳）

掃除して
スノードームをひっくり返して

【評】普段、スノードームをひっくり返すこともしなくなっているのだろう。棚の掃除で取り上げたのを機会に、ひっくり返す。何気ない日常の機微を感じさせる。

● 早川のり ● （愛知県 29 歳）

気をつけていても踏む蚯蚓、謝る

【評】「謝る」は反射的な行為なのだろう。作者の人間性が出ている。

● マズルカ ● （山口県 20 歳）

制服があれば
それなりには見える

趣味は辞典を集めることです

【評】「それなりには見える」は、真面目な学生ということだろう。しかし、「趣味は辞典を集めることです」は、それなりを越えている。ちなみに、私は辞書集めが趣味の人に出会ったことはない。

● 藤 雪陽 ● （長野県 37 歳）

むらさきの朝

雪のにおいがするね

【評】初雪がやってきそうな朝。「むらさきの」が、まだ薄闇の清澄な空気感を伝える。視覚の前に雪は匂いでやってくる。